



【東大教授時代】

「肝を練る」実践し説く

東京大学の教授となった田中館愛橋は、常に弟子たちに「注意の集中」を求め、教え続けた。

弟子だった中村清二（光学・地球物理学者）は著書に「館先生は仰々しく教えてやるぞという態度は決して示されない。笑いながらヒョイヒョイと教えが出てくる。まさに天衣無縫の人徳のしからしめる所だ」と残している。

田中館は「実験が首尾よく成功するには唯一つしか方法がない。それは全ての準備、全ての操作が正しく行われた時のみ成功するのである。どれか一つでも正しからざるものがあれば必ず失敗する。故に注意を集中して行動す

ることが成功の秘訣である」と教えた。

また、弟子の回顧録によると、「どんな難しい事でも求めれば与えられる」と説き、常に「真剣な仕事をするので、大いに肝を練る事ができる」と実践してみせた。

肝、すなわち「勇気や度胸」と「覚悟」とを持って命がけで勉学に臨めると田中館は激励した。

濃尾大地震の現地調査では「あれが無くて困る、これが無くて困るということを決して言うな」と教え、機器の小さな不良は手近なもので解決してみ



東京帝国大学教授時代の田中館愛橋（前列右から2人目）。同大理論・実験物理学科の教え子たちの卒業記念写真に納まる（1903年）（二戸歴史民俗資料館提供）

せた。

「館先生は学生の質問に、共に学ぶという態度で自分で考えて答えてくれた。授業には味があった」。授業はいつでも非常に啓発的で、精神教育までも含んでいた。「講義は能弁でも達弁でもなく、まるで一人で嬉しそうに楽しんでやっているようだった」という。

1893（明治26）年4月3日、37歳の田中館は、母の薦めに従い、盛岡の本宿キヨ子と結婚式を挙げる（婚姻届は6月12日）。異人館を借りて暮らし、目立ち始めた田中館の白髪を新妻が抜くという、微笑ましく幸せな新婚生活。翌年の3月5日に長女美稲が誕生し、一家は喜びに包まれた。ところが10日後の15日、妻キヨ子は産後の不良で亡くなる。妻の床の前で田中館は乳飲み子を抱えたまま男泣きした。

田中館には日本各地の地磁気測量という大事業が控えており、悲しむ間もなく京都、愛知、福島へ、6月には北海道北部の磁気測定へと飛び回る。亡き妻と首もまだすわらない娘を思った歌が残る。

「家思う 心移して 国のため つくせといひし 妹はいづくに」

家は私を守りますから家族の心配を忘れ、お国のために尽くして送った妻はもうどこにも居ない、という心情を歌っている。

田中館はその後再婚せず一人娘を育てた。

（中村誠二 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 娘は男手一つで

母が3人

田中館愛橋の生母キセは、1862（文久2）年、6歳の弟洋次郎を残し病死した。父稲蔵は後妻にエキを迎え弟甲子郎が誕生したが、エキも1875（明治8）年に病死。父はキタを迎え弟寅士郎が生まれた。1883（明治16）年に父稲蔵が死去し、愛橋は継母キタが亡くなるまで大切にされた。愛橋の妻キヨ子が娘を産んで間もなく病死後、男手一つで娘を育てたのは、3人の母を持った苦労を娘にさせたくない愛情故か。